

2018年11月25日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「天よ聞け、地よ耳を傾けよ」

聖書：イザヤ書1:2～20

イザヤ書の始まりは、神がユダの王、民を被告人として裁判を起しているという形をもって始まっている。ユダ国の王をはじめ、民が訴えられたわけである。何故、神はこのような訴えをしているのか。その訴えによれば、ユダの国と民は、「ソドムのよう」であり、「ゴモラに似たもの」とであると言う。「ソドムとゴモラ」は神の審判によって滅ぼされた町のこと。その町に似たものと言われるほどに病んでいたということになる。この時代はウジヤ王の時代でユダ国にとって最も繁栄した時代、豊かな時代だった。神殿で行われる礼拝、祭りの捧げものは、豊かさのゆえに羊や牛、作物の実りが惜しげも無く捧げられて行った。

しかし、一步神殿の外に、エルサレムの中心地から外に出るとそこには社会的弱者が住む村や町があったわけである。この時代の豊かさは、社会的弱者の犠牲のゆえに成り立っていたのである。神はこう語る。「お前たちが手を広げて祈っても、わたしは目を覆う。どれほど祈りを繰り返しても決して聞かない。お前たちの血にまみれた手を」(15 節)。ユダ国の王の手、裕福な民の捧げ物をする手、祈りを捧げる手を「血にまみれた手」と評す。いかに社会的弱者の犠牲によって、地方民の苦難と嘆きによって成り立っていたか。エルサレムの富は、地方民の苦難と嘆きによるものだということ。このような構図はいつの時代もある。今の世の富も弱者の犠牲によって成り立っている。

神はその現状を見ておられ、あなたの富は、あなたの捧げる礼拝は、清いものか、真実なものかと問う。「天よ聞け、地よ耳を傾けよ」と。

もう一つ見ておきたい。神は、罪を犯す者を切り離すことはなさらない。「論じ合おうではないか、と主は言われる」(18 節)。神は、私と向き合い、語り合おうとされる。罪ある者に対しても期待を注ぐ。「たとえ、お前たちの罪が緋のようでも／雪のように白くなることができる。たとえ、紅のようであっても／羊の毛のようになることができる」。まさにキリストの十字架によって、私たちの罪が覆われたように、罪が緋のようでも紅のようであっても、雪のように、羊の毛のように白くなることができると。

教会歴ではもう「降誕前第5主日」。いつの間にかクリスマスの音が聞こえてくる時期にもなった。クリスマスはまさに、私たちの罪があらわにされ、罪の赦しが示され、そのような私たちと共に歩まれる約束が成されていく。(神谷)